

枢
の
狩
人

装幀 國枝達也
 装画 緒賀岳志

1

歌舞伎町は、東京都新宿区の中央やや西寄りに位置する、東西約七百メートル、南北約五百メートルの区画の地名である。北側に比べ南側はすばまった台形をしていて、北側を職安通り、南側を靖国通りが走り、東側は明治通り、西側をJRの線路がはさんでいる。

台形の南東の角、花園神社を囲む一画は、歌舞伎町から削りとられたように欠けていて、新宿五丁目と地名がかわる。

町名、歌舞伎町の由来は、終戦直後、焼け野原となった新宿に歌舞伎の劇場を誘致し、復興計画の要にしようと考えた、当時の東京都都市計画課長、石川栄耀の命名による。

だが実際に誘致を発案し、石川にもちかけたのは、昭和二十年、焦土となった新宿でいち早く復興協力を立ち上げ、翌年区画整理組合を結成した、角筈一丁目北町の町会長、鈴木喜兵衛であった。

新宿に歌舞伎劇場を誘致するのは、鈴木の悲願だった。その夢はかなわなかったが、歌舞伎は町名に残った。

そしてもうひとり、喜兵衛という名の人物が新宿には深くかわわっている。

昭和二十年からさかのぼること二百四十七年、元禄十一年（一六九八）に、他の町人、市左衛門や忠

右衛門などとともにも幕府に五千六百両という大金をおさめ、宿駅開設を願いでた、江戸浅草阿部川町の名主、高松喜兵衛（のちに喜六と改名）である。

宿駅開設を願いでた理由は、この三名の商いからうかがい知ることができる。

喜兵衛、市左衛門、忠右衛門は、いずれも浅草吉原で娼家を営んでいた。この三名は、内藤新宿にも娼家を開こうと考えたのだ。

宿場として生まれた新宿の町は、太平洋戦争を経て歌舞伎町を擁し、東京都最大の盛り場となった。

警視庁新宿警察署の管轄区域は、新宿区のうち、新宿三丁目と五丁目的一部、同六丁目、七丁目、歌舞伎町一丁目、二丁目、西新宿一丁目から八丁目、北新宿一丁目から四丁目、余丁町の一部、大久保一丁目から三丁目、百人町一丁目から三丁目まで、となっている。

この管轄区域全体において、歌舞伎町が占める広さはわずか十五分の一でしかない。しかし発生する事件の数は、新宿署が扱う事案の大きな割合に達する。

その歌舞伎町で、今年最多となる十八名の死傷者をだす事故が発生した。

事故の現場は、歌舞伎町一丁目に所在する「東京油脂ビル」で、昭和二十年代の終わりに同名の会社が社屋として建設した地上五階建ての建物だった。

東京油脂は昭和五十年に会社を解散したが、建物は転売され飲食店などに貸しだされていた。

歌舞伎町には高層ビルが少なく、四、五階建ての、こうした小規模な低層ビルが多い。

高層ビルを建設するには接道が悪く、必要とされる大規模な土地買収も、終戦直後からのさまざまな法人、個人による売買、貸借のせいで権利の所在が著しく複雑となっているため、不可能といわれている。

そのためかなり老朽化した建物であっても、内装だけをつくろって貸しだされることが多い。非常階段や火災報知機の設置など、消防署の指導がひっきりなしに入る建物も少なくなく、所有者との連絡に

すら係員が苦慮するケースもあとを絶たない。

東京油脂ビルは、最上階の壁に社名が刻まれていたため、所有者がかわつたのちも「アブラビル」と呼ばれつづけることになった。「アブラビル」の四、五階には老舗の中華料理店「桃李閣」が入り、一、二、三階は、それぞれ異なる飲食店、風俗店が入っていたが、飲食店は閉業、風俗店は摘発をうけて営業停止となり、それを機に一、二、三階を改装して大型店舗を造る工事が始まった。

工事は「桃李閣」の営業時間を考慮し、深夜から午前中にかけての時間帯におこなわれた。連日、閉店時間の午後十一時を過ぎてから開始され、ランチタイム前の午前十一時には終了するというタイムスケジュールだ。

工事が始まって二週間が経過した日の晩、突然、ビルの四階の床が抜け、崩落した。

五階は宴会場で、その日の利用者はいなかったが、四階には二十名近い、客と従業員がいた。

四階の床が抜けた数分後、三階の床も抜けた。落ちてきた四階部分の重さに耐えられなくなったのだ。さらに二階部分の床も崩落し、四階にいた被害者の大多数は一階まで落下し、その上に崩壊した建材が降り注いだ。

近隣では、落雷を思わせる轟音のあと、地響きとともに地震のような揺れが生じた。

粉塵がたちこめ、あたりをおおい、現場は騒然となった。パニックとなり、右往左往する群衆の中、駆けつけた警察官も、初めは何が起こったのか、判断がつかなかった。

「アブラビル」は、堅牢な外観をそのままとどめ、内部だけが崩壊していた。

火災発生の報をうけた消防車が到着し、さらにあたりは騒然となった。火災じたいは小規模だったが、ビルの内部に一步踏み入った消防隊員は立ちすくんだ。

崩落した床のあちこちに、まるで巨人が投げ捨てた人形のように犠牲者の姿があった。悲惨な火災現

場には慣れている消防隊員ですら言葉を失うほどの惨状だった。

消防隊員はただちに救助作業に入った。複数の救急車も現場に向かっていたが、警察官の交通整理があつたにもかかわらず、埋めつくされた野次馬に、容易には近づけないありさまだった。崩落事故の発生が午後八時過ぎで、歌舞伎町に最も多くの人間が訪れる時間帯であつたことも災いした。

十数台のバトカー、百名を超える警察官を新宿警察署は現場に投入し、収拾にあつた。救助作業は夜を徹しておこなわれ、十八名の犠牲者が「アブラビル」から運びだされた。

現場や搬送された病院で十名の死亡が確認された。

死者十名、負傷者八名という大惨事に、警視庁捜査一課はただちに動いた。こうした事案を専門とする捜査班を中心に、新宿署に捜査本部が設けられた。

新宿署は、刑事課の所属員以外にも捜査本部入りを求められた。捜査本部に配属された捜査員は、警視庁捜査一課所属と新宿署所属の二名一組のチームで捜査、情報収集にあつた。

新宿署組織犯罪対策課に所属する佐江警部補は、捜査本部に組み入れられなかった。

佐江はH県で発生した殺人事件の捜査協力を求められ、帰京したばかりで、各方面への報告や拳銃使用に関する査問に忙殺されていたのだ。

が、それは表向きの理由で、佐江の性格を危ぶんだ組対課長が、捜査本部への投入を回避したのが真相だった。

警視庁捜査一課の刑事となれば、刑事警察におけるエリートである。そういう人員と佐江を組ませたら、トラブルが起きると課長は危惧したのだ。

これまでも佐江が警視庁の刑事とチームを組んだことはある。が、捜査一課強行班の副班長を暴力団との銃撃戦で死亡させ、公安部外事二課の管理官をこともあろうに、指揮車内で殴りつけていた。

捜査一課強行班の副班長が殉職したのち、佐江は辞表をだした。辞表は組対課長の預かりとなつてしたが、その間に、三年前H県で発生した未解決事件の重要参考人が、佐江の保護、同行を条件での出頭を、H県警に打診してきた。

H県警捜査一課長の要請をうけ、佐江はH県に出張し、重要参考人の保護から始まった、殺人事件の捜査にかかわった。

事件は解決し、佐江は辞表を撤回した。

新宿署には永年、異動の対象とならない警察官が二名いる。一名は生活安全課の警部で、もう一名が佐江だ。

警視庁組織犯罪対策部暴力団対策課では、「新宿の極道のことを知りたければ、新宿署の佐江に訊け」といわれていた。

新宿の暴力団員のあいだでも、佐江を知らない者はいない。小太りでお洒落とはほど遠いなりの佐江を、生意気盛りのチンピラはなめてかかる。その結果、ぐうの音もでないほど締めあげられるのだ。

今やいい顔となった組長や若頭でも、たいてい一度や二度は、佐江に締めあげられていた。追い込まれ解散した組もある。

佐江は知らないが、警視庁組対部が、佐江をひっぱろうと検討したことがあつた。が、結果はだすもの、違法ぎりぎりの捜査法や容赦のない訊きこみなど、「本庁におくには危ない」という判断が下された。不祥事が表沙汰になればいつでも切り捨てられる、所轄の前線におき、必要なときに使えばよい、と上層部は考えたのだ。

自分がそういう目で見られていることを、佐江は薄々気づいている。

それでいつこうにかまわない。これ以上出世する気はないし、自分には極道や愚連隊、その情婦や娼

婦といった連中の相手が合っている。こぎれいなサラリーマンやサラリーウーマンと接するのは苦手なのだ。華やかな表通りより、小便臭く、チンピラがカツアゲにカモを連れこむような裏通りを歩きたい。

ただカスにはカスなりの意地がある。それは警察官でも極道、チンピラでも同じだ。外国人犯罪者であつてもかわらない。

好んでゴミ溜めに流れてくる人間はいない。

自分の責任もあるだろうが、人生の歯車が狂い、そこに運の悪さが重なってしくじる奴はどこにでもいる。それを負け犬だと十把ひとからげに蔑むのは、痛い思いをしたことのない人間だ。

同情は決してしない。ただ理解できるものは理解する。その上で、警察官として対処するのが佐江のやりかただった。

馴れ合いは許さない。が、底辺であつてもけんめいに生きている者には、敬意をもって接する。常人ならば眉をひそめるような仕事だとしても、それしか選択の余地の、なかった者が食いぶちを稼ぐのが、新宿という街だ。

新宿を好きかと問われたら、答に迷う。

が、自分が新宿に向いた人間だという自覚はある。

それゆえに、警察官としての答をだせているのだと考えていた。

2

「桃李閣崩落事故捜査本部」の立ち上げから一週間が経過した。捜査本部には、東京消防庁や東京都、

建設省からも係官が派遣され、情報の収集や交換に当たっている。

事故原因に関しては、下層階でおこなわれていた改装工事を主因とする意見が圧倒的で、業務上過失致死傷の疑いで、施工業者に対する捜査が始まっていた。

十八名の犠牲者の氏名は個人情報保護の観点から発表されておらず、捜査本部に属していない佐江は知らなかった。が、署内の噂で、警察官が一名含まれていた、というのは聞いていた。

新宿警察署の署員ではない。さすがに署員であれば、伝わる筈だ。

「手が空いたときでいいから、捜査本部に顔をだしてほしいそうだ」

組対の課長から佐江がいわれたのは、遅めの昼食を終えて署に戻ってきたときだった。

「どうしたんです？ 人手が足りないとは思いませんか」

「身許のわからないホトケがいて、マルBじゃないかと思われるのだが、指紋が記録にないらしい」

訊ねた佐江に課長が答えた。

「じゃあなぜマルBだとわかるんです？」

「左手小指先端欠損、背中全面に刺青が入っている」

「そりゃあどう見ても極道じゃないですか。指紋の記録がないってのは、どういうことですか？」

昼に食べたタンメンのモヤシが菌のすきまにはさまっている。舌先で探つてもとれないので、自分のデスクからとりだした爪楊枝をくわえ、佐江は訊き返した。

「不明だ。指紋をとられたとしても記録に残らないくらい昔か、一度も逮捕されたことがなかったか」

「指を詰めてるのに、一度もパクられてないなんて話がありますかね」

課長の答に佐江は首を傾げた。

るから、見に来てくれと——」

「わかりました。今からいつてきますよ」

捜査本部は大会議室におかれていた。長机が並び、パソコンのキーボードを叩くパチパチという音が響いている。ざっと二十名からの人間が机に向かっていた。その倍の捜査員が、外で情報収集にあたっている筈だ。

「佐江さん——」

佐江に気づいた新宿署の副署長が手をあげた。捜査本部長をつとめる、キャリアの警視正だ。

かたわらに新宿署の刑事課長と、おそらくは捜査一課の管理官らしき、五十代の男がいる。佐江は無言で三人に近づいた。三人が囲む机の上にもパソコンがおかれている。

「佐江さん、こちらは捜一特殊の池端管理官です」

副署長が五十代の男を紹介した。

「池端さん、彼が話した佐江さんです」

池端は佐江を見つめた。

「谷神さんのとき、いつしよだったそうですね」

佐江は池端を見返した。谷神は佐江が組み、銃撃戦で殉職した一課の刑事だ。

佐江は無言で頷いた。その銃撃戦では佐江も腹に銃弾を食らい、死にかけた。

「不思議な人でした。物腰はやわらかいのに、どこか近寄りにくくて」

「いろんなものを抱えておられたようです」

言葉少なに佐江は答えた。微妙な緊張感が漂った。

刑事課長が咳ばらいした。

「ちょっと見てもらえないかな」

パソコンを操作した。画面に顔写真が並んだ。すべて死者のものとわかる。

『桃李閣』のマル害だ」

画面に目を移した佐江は息を吸いこんだ。

十数年前、佐江が新宿署に配属される前、機捜で同じ班にいた若い刑事の顔があった。

「滝、ですか」

佐江はつぶやいた。

「知り合いだったか」

刑事課長がいった。

「機捜にいたとき、駆けだしで配属されました」

佐江になつき、マルB相手のやりかたを教えた記憶がある。その後配属された署で知り合った女性警察官と結婚し、披露宴にも招かれた。

「滝偵二巡査部長。二機捜の池袋にいた」

事件発生の報をうけて現場に駆けつける機動捜査隊は、第一、第二、第三と分かれていて、その上で複数の分駐所に配属されている。二機捜の池袋分駐所は、渋谷や新宿と並ぶ鉄火場だ。

「池袋に？　すると現場にいたのは——」

「プライベートだと思われるが、誰かと待ち合わせていたのかもしれない。何しろ四階から一階まで床が抜けたんだ。誰がどの場所にいたのかすら、当初は判明しなかった。わかっているのは、犠牲者は全員『桃李閣』にいたということだけだ。三階から下の階は営業していなかった」

刑事課長は答えた。

結婚後二年で滝の妻は警察を退職した。姉さん女房で、子作りに励む予定だと、翌年送られてきた年賀状には書かれていた。

が、その後離婚したとの噂を聞いた。

「他に知った顔はありますか？」

池端が訊ね、佐江はパソコンの画面に目を戻した。十人のうち三人が女性だ。

「写真は拡大できます」

「指を詰めて、刺青しよってたというのは？」

佐江が訊ねると、池端が男のひとりをクリックした。

写真が拡大された。丸顔で頭髪が薄い。年齢は四十代から五十代といったところだろう。

「この人物です」

複数の写真が表示された。解剖台におかれた全裸うつぶせのものもある。背中一面に刺青が入っていた。

「指紋を調べましたが、記録がありません」

佐江は画面に顔を近づけた。刺青の絵柄がわからなかった。

「何の絵です？」

「虎、じゃないかと思うのですが。損傷がひどくてよくわかりません」

崩落した建材の下敷きになったのか、背中がひどく傷ついていた。

先端が切断された左手小指の写真もある。

それを見つめ、再び画面を顔写真に戻した。

「どうだ？」

刑事課長が訊ねた。佐江は首をふった。

「知らない顔です」

「もうひとり身許がわからないのが、この女性だ」

パソコンの画面が変わった。整った顔立ちをした中年の女だ。四十代後半から五十代に見える。

「犠牲者の所持品は、身に着けていたもの以外はすべて現場に散らばり、瓦礫の下から見つかっていない。

携帯電話は何台も見つかったが、大半が粉々の上、焼けていて、データの復元が難しい。食事のときテーブルの上に携帯をおいていて、吹っ飛んでしまったようだ」

「女性ならハンドバッグがあるのでは？」

「ハンドバッグはふたつ見つかった。この二人が客で、こちらは従業員だ」

身許のわからない中年の女と三十代と思われる女の写真をまず刑事課長はさし、そのあとに別の中年

の女を示した。

「死亡者の中に従業員はもうひとりいる。店長だ」

刑事課長は別の男の写真をさした。

「残りの従業員は、厨房にいた五名とフロアにいた三名で、全員生きている」

佐江は刑事課長の顔を見た。

「すると助かった八人というのは――」

「すべて従業員だ。十人の死者は、『桃李閣』にいた客全員と、二名の従業員ということになる」

「客の全員が死亡ですか？」

「ひどい話だ。中華料理を食いにいって、床が抜けて死ぬなんて夢にも思わなかったらう」

刑事課長はいった。

再び画面に目を戻した佐江は小さく唸った。

店長だと刑事課長がいった男の顔を拡大した。

「この男を知ってます」

『桃李閣』の店長か？」

「木口という名じゃありませんか？」

池端がキイボードに触れた。

「そうです。木口武雄、六十二歳。十年以上『桃李閣』に勤務し、昨年から店長をつとめています」

「もうなくなつた田代組という組にいました。組が潰れて足を洗った、と聞いています」

佐江はいった。池端が息を吐いた。

「せつかくカタギになつたのに、こんな事故に巻きこまれたのか」

「それともうひとり」

佐江は並んでいる写真のひとりを示した。

「この男も知っています。久保田といいませんか」

七十代の男だ。記憶がよみがえってきた。

「待ってくれ。そうだ。久保田晃、七十四歳。無職だ」

刑事課長がキイボードを操作し、頷いた。

「久保田は男性二人と同じテーブルで食事をしていたことがわかっている」

「この男も元田代組です。組が潰れたときに足を洗いましたが、高利貸しに転業し、けつこういい思いをしていた筈です」

佐江はいった。

「そちらも引退したようだ。同じテーブルで食事をしていたのはこの二人だ」

刑事課長は別の二人の男の写真を拡大した。久保田と同世代に見える。

「この三人は足立区の中学の同級生で、半年に一度くらい『桃李閣』に集まり、食事をしていたらしい。久保田がいつも席を予約し、予約名は『番長会』だったそうだ」

「かつての悪ガキ仲間ですか。あとの二人に見覚えは？」

池端が佐江に訊ねた。佐江は首をふった。

「知らない顔です」

「まあ悪ガキだったとしても、極道にまでなるのはそういけませんからね。久保田も一応足を洗っているわけですし」

池端は頷いた。

「他の人間についてはどうだ？」

刑事課長がいった。画面は再び十人の顔写真に戻った。

滝、三人の七十代の男、身許不明の男と身許不明の女、三十代と思われる女と四十代の男、それに店長だった木口に、従業員という説明のあつた中年の女性の十人だ。

「この男女は同じテーブルで食事をしてた。岩崎三紀夫四十四歳と島田さつき三十七歳、二人は港区内の建設会社の同僚で、双方既婚者だった。岩崎の自宅は世田谷区で島田の自宅は墨田区だった。職場とも自宅とも離れた新宿で食事をしてたのは、同僚や知り合いを避けるためだった可能性がある」

刑事課長はつづけた。

「滝は誰といつしよだったのです？」

佐江は訊ねた。

「ひとりだ。滝と、あとの二人、身許のわからない刺青をしょつた男、身許のわからない女、この三人

「ひとりだった」

「ひとり、ですか」

佐江はつぶやいた。「桃李閣」は、昔からある中華料理店だが、いわゆる高級店ではない。ラーメン屋レベルではないにしても、ひとりで入るのがためられる類の店ではない。

佐江も何度かひとりで食べに入ったことはある。味は可もなく不可もない、といったところで、近年増えている大陸系の新華僑が経営する中華料理店とは異なる、日本式中華料理の老舗だ。

「この三人がそれぞれひとりで来店したことは、生きのびた従業員が証言しています。それをもとに作ったタイムテーブルがこれです」

池端がパソコンを操作した。

「4卓、午後六時より『番長会』、久保田、山口、小松三名。待ち合わせ来店」

「8卓、午後六時四十分より、岩崎、島田、二名、連れだつて来店」

「1卓、午後六時五十分、身許不明女性、単独で来店」

「7卓、午後七時、身許不明男性、単独で来店」

「2卓、午後七時十分、滝、単独で来店」

「滝巡查部長が最後の来店者で、来店時間はおおよそのものです。崩落は、午後八時五分前後に発生しました」

池端が説明した。

「従業員から聞いた、各卓の配置図です」

四角形の店内は、「1、2」「3、4、5」「6、7」「8」と横並びにテーブルがおかれている。縦に見た場合、1卓、4卓、6卓の順で並び、さらに2卓と5卓、7卓が並び、8卓は少し外れた位置にある。

「予約の『番長会』は、従業員が4卓に案内したが、残りの五名はすべて自分でテーブルを選んだ。岩崎、島田のカップルが8卓を選んだのは、離れた席を好んだからのようだ」

刑事課長が補足した。

「滝がなぜ『桃李閣』にいたのか、わかっていないのですか」

佐江が訊ねると、刑事課長と池端は顔を見合わせた。

「わかっていません。滝巡查部長は、当直朝、当直明けで、翌日の夕方まで非番でした。休みなので新宿まで食事に来たのか」

池端がいった。佐江は首をふった。

「わざわざ食いにくるほどの店じゃありません。『桃李閣』にいたのは、別の理由があつた筈です。誰かと待ち合わせしたか、誰かを追っていたのか」

「待ち合わせだとすれば、来店から一時間近く待ちぼうけを食らったことになります」

池端がいった。

「従業員の話では、ビールと焼売を頼んでいたそうだ」

刑事課長がつけ加えた。

佐江はテーブルの配置図を見た。滝がすわった2卓は、横は身許不明の女がすわっていた1卓、縦は無人の5卓と隣り合せている。

斜めに「番長会」の三名がいた4卓、5卓をはさんで7卓が身許不明の刺青男だ。

もし誰かを監視していたとしても、同じ飲食店に入るのはふつう避けるし、まして隣り合わせのテーブルなどすわらない。

ひとりで食事に入ったのでなければ、待ち合わせをしていたと思われる。

「待ち合わせをしてはいたが、相手が何時にくるのかわからない。そこでビールと焼売を頼んだ、とも考えられますね」

池端の言葉に佐江は頷いた。刑事課長がいった。

「現在までの捜査では、下層階の工事が原因での事故という可能性が高い。ただ犠牲者の中に二人も身許不明がいるというのはちよつとな。事故直後は、問い合わせがかなりあった。身内が帰宅しないが、現場でこういう人間は見つかつていないか、と。一週間たつて、今はだぶ落ちついた。身許不明の二人に該当するような問い合わせはない」

「日本人ではない可能性もありますが、歯の治療跡などを調べても、手がかりがないのです」
池端がいつて、つづけた。

「ただ日本人ではないとしても、同居する者などがいれば、問い合わせがあつておかしくないのですが」
佐江は刺青の男の写真に見入った。刺青の絵柄は、池端がいうように虎に見えなくもない。

次に欠損している左手小指先端の写真を見つめた。

通常、指を詰めた傷跡は、皮膚をかぶせて表面がなめらかになるよう医師が治療する。

この男の指はそうではなかった。骨こそ露出していないものの、変色しかさぶたのようになっていた。きたないだろう。いかにも詰めたあと、そのままにしていたように見える。化膿かのうしておおごとにならなかったのが不思議だ」

刑事課長がいった。

「身許不明の女性のほうは、美容整形手術をうけた跡が、顔と胸にありました。胸はいわゆる豊胸手術ですが、顔はいく度かいじつていようです。新宿区内の美容整形外科に写真を回して、身許がわからないか協力を要請しています」

池端がいった。

「美容整形手術を何度もうけていたことを考えると、飲食店あるいは風俗店にとめていた経歴があるかもしれない。男性、女性どちらの身許不明者も、生き残つた『桃李閣』従業員によれば、常連ではなかったようだ」

刑事課長がいい、池端は佐江を見た。

「男なら、腹が減つて手近の店にとびこむということがあるかもしれませんが、女性の場合、常連でもないのにひとり中華料理屋というのは珍しいと思いませんか。やむにやまれず入るとしても、喫茶店や洋食屋のようなところを選ぶような気がするのですが」

「女の人のことはよくわかりませんが、この女性にホステスなり風俗嬢の経験があつたとすれば、ひとりで外食することに慣れていたのかもしれない。見つかったハンドバッグから、身許のわかる品はでなかつたのですか」

「島田さつきが所持していたのではないハンドバッグから財布は見つかった。現金の他に、いくつかカード類が入っていたが、クレジットカードやキャッシュカードはなく、大半は美容院や薬局などの会員カードの類だつた。ただ問題は、それらのカードに入っている名前が複数あつて、住所、氏名ともに実在しないものばかりだつたんだ」

刑事課長が渋い表情で答えた。

「住所、氏名ともに実在しない？」

佐江は訊き返した。

「そうだ。しかもそれらのカードや会員証を発行している店舗は、港区、中央区、中野区と複数の場所に分かれている。薬局など、ふつうは自宅の近くの店舗を使うものだが、発行元が、赤坂、勝どき、中

野本町の離れた三店舗だ。記載されている名前もすべて異なる」

池端がパソコンを操作した。

「清水洋子、金村ひとみ、高橋あずさ、木村ちさと、村川加寿子、市倉早苗」

六つの名前が並んだ。

「これらの名前について、捜査員があたっていますますが、マル害と思しい人物は今のところ見つかりません」

池端がいった。佐江は首をふった。

「素人じゃありませんね」

「素人じゃない、とは？」

池端が訊き返した。

「六つともすべて偽名である可能性が高いということです。本名以外に、ひとつふたつの偽名をもつのは、水商売の源氏名などで考えられますが、六つはありえません。使っている本人すら混乱しかねない数です。六つの名前を使い分けていたとすれば、決して本名を知られたくない理由があったのでしょうか」

「理由は何か？」

刑事課長が訊ねた。

「さあ。ただまっとうな人間なら、六つも名前を使い分ける筈がない。詐欺師か、どこかの作業員とか」

「作業員？」

池端の顔が険しくなった。

「中国や北朝鮮の作業員だったかもしれないといわれるのですか」

「あくまで可能性の話です」

佐江は首をふった。

「お宅の課長に話は通す。この身許不明のマル害について、動いてもらうわけにはいかないだろうか。特にマルBと思しい人物に関する情報が欲しい」

刑事課長がいった。

「俺はかまいません。今、控えているのは報告書作りだけです。ただそうになると、捜一、の誰かと組む、ということになるのですか」

佐江がいうと、池端と副署長が顔を見合わせた。

「今のところ、新宿署と捜一、さんとのペアリングは全部決まっている状態で、捜査がもう少し進むまでは、佐江さんと組む者がいないという状況です」

副署長がいづらそうに告げた。

「つまり俺の相手がいない、と」

「申しわけないがそういうことになります」

池端が頷いた。

「本来なら最初から、捜査本部に入ってもらえばよかったんだが……」

刑事課長が語尾を濁した。

「かまいませんよ」

佐江はいった。

「適当な人間が見つかったら、すぐ佐江さんのサポートにつけますから」

池端がいったので、佐江は笑いだした。

「俺のサポートだなんて。捜^一のサポートをするのが、俺ら所轄の仕事でしょう。気をつかいすぎじゃないですか」

刑事課長が咳ばらいした。

「まあ、いろいろとあったからな」

「俺と組んでまた何かあったらたいへんですからね」

佐江はいつて、池端を見つめた。

「じゃあ報告はどうします？ 会議にでるのもアレなら、何かわかったら池端さんに直接伝えましょうか」

「そうして下さい。私の携帯の番号とメールアドレスはこれです」

池端はいつて、名刺をだした。

「いただきます」

佐江は受けとり、自分の携帯番号が入った名刺を返した。

「いつから動いてもらえますか」

副署長が訊ねた。

「今控えている報告書が片づきしだい。明日からでも」

佐江は答えた。佐江を捜査本部に加えず、別働隊として動かそうというアイデアは、おそらく刑事課長か副署長からでたにちがいない。

佐江にとっては、捜査会議にでる手間が省けるぶん、むしろありがたい。

「よろしくお願いします」

小さく頭を下げた池端の目は鋭かった。

3

翌日、佐江は大家の監察医務院に向かった。保管されている被害者を自分の目で見るためだ。

大半の被害者の遺体は遺族のもとに帰されていた。残っているのは、「桃李閣」の店長だった木口、身許不明の二体と、引きとり手が見つからない一体だけだ。

引きとり手が見つからないのは、「番長会」で予約されたテーブルにすわっていた、小松という男だった。三十年以上前に離婚しており、近親者が見つかっていないという。このままではいずれ、行旅死亡人として荼毘^{だび}に付されることになる。

行旅死亡人とはいわゆるいきだおれのことだ。生活困窮者が多く、かつては身許のわからない者が大半を占めていた。

が、携帯電話が普及して以来、身許不明の行旅死亡人は減った。その一方、身許が判明しながら親族が見つからなかったり、見つかっても引きとりを拒むケースが増えている。

昔なら出身地を捜せば、高齢でも親族が見つかった。今は高齢者は施設に収容されることが多く、また出身地の自治体そのものが消滅していたりする。

小松は所持していた免許証から身許が判明していたが、両親と兄夫婦は死亡し、離婚した妻は、遺体の引きとりを拒んだ。離婚の理由が、小松の家庭内暴力だったのだ。

捜査本部から戻つてすぐ、佐江のもとに死亡した十名の被害者情報が届けられた。

写真の他に、着衣の詳細、所持品のリストなどである。捜査にとりかかるとは十分な情報だったが、佐江は自分の目で遺体を見たかった。死者に対する敬意であり、この目で見て得られる手がある

かもしれない。

監察医務院の冷蔵庫に安置された遺体と、佐江は対面した。合掌し、カバーを外す。

まずは刺青をしまった男だ。

ひと目見て、只者ではないと感じた。

生前はどれほど粗暴で他人から嫌われる人間であつても、死者になればその風貌はおだやかになる。いわゆる「仏」の顔になるからだ。

この男はそうではなかった。目を閉じていても、眉間と口もとに険がある。いく度となく修羅場をくぐり、安寧のない日々を送っていたにちがいない。

欠損した小指の先端は、鋭利な刃物で切断されたのではないとわかる。

通常、極道が指を詰めるときは、出血と痛みをおさえるために、小指のつけ根をきつく縛り、感覚が鈍ってから出刃包丁などで一気に切断する。その後、医師のもとに向かう。

切断面がなめらかな者が多いのは、その際に処置をうけるからだ。

だがこの男はそうではなかった。事故か何かで、指を潰されたのかもしれない。

佐江は男の左手をつかんだ。ぶあつい、力のあるような掌をしていて、それを裏返し、指のつけ根の変色に気づいた。拳を握ると盛り上がる関節部分が四つすべて、白くなっている。表面に触れると、硬く、ざらついた感触があつた。

男の右手を見た。右手の指のつけ根も同じように硬く、変色している。

長年、空手や拳法をやった者にできるタコに見えた。

首は太く、胸板も厚い。かなり鍛えた体をしている。それでも落下の衝撃と、落ちてきた建材による内臓破裂から逃れられなかったのだ。

佐江は男の肩に手をかけ、遺体を横にした。背中刺青を見るためだ。

背中には激しい擦過傷ができていた。血液はふぎとられているが、内出血の跡もある。絵柄がわかるまで、しばらく時間を要した。

松の木の生えた岩山に虎がいる。その手前に、半裸でアバラが浮きでた幽鬼のような人物が描かれていた。

極道が入れる刺青にはさまざまな絵柄があるが、多くの極道を逮捕してきた佐江でも、初めて見る絵柄だつた。

彫師によって得意不得意があり、刺青を入れたい者は、求める絵柄にあわせて彫師を訪ねる。また、タトゥーと和彫りは同じ刺青といつても、針を入れる深さがまるで異なる。

和彫りは皮膚の下深くに針を刺し、染料を入れるため、激痛と発熱を伴う。極道のあいだで、刺青が「ガマン」と呼ばれるのはそのせいだ。

虎の黄と松の緑が鮮やかで、絵柄も考えると、和彫りとは思えない。

佐江は携帯をとりだすと、男の刺青を何枚か撮影した。

もう一度、男をおおむけにした。刺青は背中だけで、肩や上膊部には入っていない。これも和彫りとは異なる。

男の右わき腹に笑窪のようなくぼみがあつた。

同じものが佐江の腹にもある。佐江は小さく息を吐いた。

銃創だつた。銃から発射された弾丸は、飛行を安定させるため銃身内部に切られた旋条によって激しく回転している。それが人体に命中すると皮膚や肉を巻きこみながら内部に向かう。射入口は収縮し、回転運動によって破壊された皮膚には、くぼみのような傷跡が残る。つまりこの男は、銃で撃たれた経

験があるのだ。

佐江はもう一度男の顔を見つめ、合掌すると、カバーを閉じた。

気が進まなかつたが、身許不明のもうひとり、中年の女の遺体も見た。

こちらは、整った顔立ちで、かなりの美人だったであろうことがひと目でわかる。

髪は肩までの長さでそろえられ、やや明るい褐色に染められている。掌を調べると、水仕事をあまりしていないと思われる指先には、きれいなネイルアートが施されていた。

装飾品は、右手中指に指輪、プラチナとダイヤと思しきペンダントをつけていた、とあった。

顔にも体にも、目立つ傷跡はない。

美容整形手術をうけていたとしても、かなり前のことだろう。

死者とはいえ、女性の裸体を見ていることに抵抗を覚え、佐江は合掌すると、早々にカバーを閉じた。身許不明のこの二人が知り合いだった可能性はあるだろうか。

記録によれば、この女は午後六時五十分に「桃李閣」に来店し「1卓」を自ら選んですわっている。

男のほうは午後七時に来店し、「7卓」を選んですわった。

「1卓」と「7卓」は離れている。二人が言葉を交わすのを見た従業員もおらず、知り合いだった可能性は低い。

男のあとに「桃李閣」に入ってきたのが警察官の滝だ。十分後に来店し、女と隣り合わせの「2卓」にすわった。

犠牲者の中では、滝が最後の来店客だった。

三人とも十分間隔で七時前後に来店していて、その点では誰かと待ち合わせをしていた可能性がある。来店時に待ち合わせとは告げていないが、「桃李閣」の四階にさほどの広さはなく、見回せば待ち合

わせの相手がいるかどうかはひと目でわかる。

しかもひとり用の席はないので、相席を勧められない限り、どのテーブルにすわってもさしつかえない。

生き残った従業員も、好きな席を選んでもらったと証言している。

したがって、待ち合わせだと、あえて告げなかつた可能性もある。

待ち合わせた人物は到着が遅れ、難を逃れた。ただ、現場の状況を見れば待ち合わせた相手の安否が気にならない筈はなく、救助に携わった消防や警察の人間に何も訊ねず立ち去るとは思えない。

むろん混乱を極めていたであろう現場で、安否を即答できる者はなかつたろう。それでも、交通整理の警察官などに被害者の情報を求めて不思議はない。

だがそういう人物がいたという情報はなかつた。待ち合わせではなかつたか、待ち合わせていたとしても、その相手はひっそりと現場を立ち去ったかだ。

現場には百名を超す警察官がいた。犯罪にかかわっている人間なら、それを見ただけで踵を返す。単独で来店した三人すべてが誰かと待ち合わせていたとは限らない。

だがもし待ち合わせていたのなら、その相手が犯罪にかかわっている可能性は高い。

監察医務院を出た佐江は、JRで上野に向かった。上野駅から千束までタクシーに乗る。

浅草に近い、吉原のソープランド街の外れに、めざす家があった。築五十年は経過している木造の二階家で、玄関に「彫猛」と表札がかかっている。

下町の匂いを濃く漂わせるしもたやには不似合いなインターホンに、警備会社のシールが貼られている。

佐江はインターホンのボタンを押した。

「はい」
若い女の声が返ってきた。

「彫猛さんに話があつてきました。佐江といます」

「どちらの佐江さんですか」

「新宿です」

「お待ち下さい」

ややあつて、朝顔の鉢植えが片側に並べられた引き戸が開かれた。

浴衣を着た女が顔をのぞかせた。長い黒髪を束ね、大きく開いた襟もとから極彩色の刺青がのぞいている。色白で、目の吊り上がった美人だ。

「どうぞ」

女は言葉短かにいって、佐江を迎え入れた。

三和土に立つと、香の匂いが鼻を突いた。

「こちらへ」

佐江は靴を脱ぎ、上がった。小さな庭に面した和室に通される。火の入っていない掘りごたつに座布団がしかれていた。

「コーヒーとお茶、どちらがいいですか」

すわった佐江に、にこりともせず女は訊ねた。近くで見ると、ひどく若い。二十になつているかどうかだろう。

「おかまいなく」

佐江は答えた。女は無言でいなくなった。

やがて、アイスコーヒーとらしい液体の入ったグラスを運んできた。

「五分、待つて下さいとのこと」

佐江は頷いた。

香の匂いはここにも漂っている。客を寝かせる枕もとで炷たいているのだ。血と染料の臭いを消し、客の気持を落ちつかせるためだ。

佐江はアイスコーヒーをひと口飲んだ。コーヒー専門店にも劣らないほどの味だ。

彫猛は酒が飲めない。飲めないぶん、コーヒーの味にこだわっている。

体質的に酒が飲めなかった彫猛は、グレしていた十代、クスリに走った。トルエンから始まり、覚醒剤に漬かるチンピラだったとき、佐江に逮捕された。逮捕を機に彫猛はすっぱりクスリをやめた。珍しいことだった。一度はまった覚醒剤を断てる者は少ない。やめるやめるといつておいて、何年かすれば再開するのがほとんどだ。

工芸高校を中退し、絵が得意で手先が器用だった彫猛を、跡継ぎを探していた先代の彫猛に紹介したのが佐江だった。

先代のもとで飯炊きから修業を始め、八年後、二代目彫猛を襲名した。

襲名披露の席に佐江も呼ばれた。警察官は佐江ひとり、刺青を入れていない客も佐江ひとりだった。和室の戸が開かれた。マスクをはめ手術用の手袋を着けた作務衣姿の彫猛だった。長身で手足が長く、頭を剃り上げている。

「どうしたい」

すわろうともせず、彫猛は訊ねた。仕事の邪魔をされたいらだちが声に表われている。

「すぐに帰る。こいつを見てくれ」

佐江はいつて、身許不明の男の刺青を写した携帯の画面をかざした。

彫猛は首をのぼし、のぞきこんだ。

「何の柄だ？ 虎か？」

「そうらしい。手前に立つてるのは人間のようだが、ゾンビみたいじゃないか」

佐江はいつた。

「確かにな。彫ってるのは日本人か？」

「それをあんたに訊きにきたんだ」

佐江は答えた。

「顔は？」

佐江は遺体の顔写真を見せた。

「死人かよ」

吐きだして、彫猛は訊ねた。

「どこの誰だ？」

「わかつていたら、あんたの邪魔はしてない」

「たぶん日本人じゃねえ。こんな黄色や緑は、和彫りじゃ使わねえ。台湾か中国だ」

「ベトナムはどうだ？」

彫猛は首をふった。

「絵柄がな。知り合いに中国人の彫師がいる。訊いてやるから、その写真を俺の携帯に送ってくれ」

「わかった」

「今日、明日には連絡する」
告げて、彫猛は部屋をでていつた。

4

彫猛の家をでて佐江は池袋に向かい、池袋駅北口に近い雑居ビルにある理髪店の扉をくぐった。ビル全体が新華僑の店で占められ、一階から四階は、食品、雑貨を扱うスーパーマーケットで、五階が理髪店と美容院、六階から八階は中国料理やバー、カラオケなどの店が入っている。従業員はすべて中国人で、客は日本人と中国人が半々といったところだ。いわゆる「新中華街」の入口にたっているビルだった。

理髪店には三台の調髪台が並んでいて、うち一台に先客がいた。

佐江は調髪している、白衣を着た年配の男に頷いた。男は一瞬嫌な顔をしたが、空いている端の台を示した。

佐江は無言で腰をおろした。白衣を着け髪を明るく染めた若い女が、佐江にケープをかけ、首もとで縛った。そのまま洗髪する。

洗髪が終わると待たされた。先客の調髪が終わり、金を払ってでていく。

年配の男は、白衣の女に中国語で何ごとかを告げた。女は頷き、店をでていつた。

女がいなくなると、年配の男は入口の扉に鍵をかけ、目隠しのブラインドをおろした。

「何の用？」

無愛想な口調で訊ねた。

「髪を切りにきた」

「嘘ね。あなた、ここで髪を切ったことない」

佐江はケーブの内側で携帯をとりだした。

死んだ男の顔写真を画面にだし、白衣の男にかざした。

「知ってるか」

白衣の男はちらりと見て、目をそらした。

「知らない」

「そうか。じゃあ、髪を切ってくれ」

白衣の男と佐江は正面におかれた鏡の中でにらみあった。

髪を切ったら、もうこないか」

白衣の男は訊ねた。

「いや。ここにくる客全員に、この写真の男を知らないか訊く」

佐江は鏡の男から目をそらさずに答えた。

「私を困らせたいか」

「困るのか」

白衣の男は顔をそむけた。しばらく黙っていたが、

「もう一度見せて」

といった。佐江は手にしたままだった携帯を掲げた。

「手に空手か拳法をやっていたようなタコがある」

佐江は告げた。

「名前は知らない。渾名はフーグイ」

「フーグイ？」

白衣の男は洗髪台で指先を濡らし、鏡に「虎鬼」と書いた。

「トラの鬼か？」

白衣の男は頷いた。

「何者だ？」

「わからない。でも危ない人」

背中に虎の絵の刺青を入れてないか」

「知らない。一度会っただけだから」

「どこで会った？」

「香港。知り合いの結婚式にいた」

「その知り合いというのは何者だ？」

「恐い人」

「黒社会か」

白衣の男は小さく頷いた。

「この男は、その結婚式でどんなようすだった？」

「どんなようす？」

「いばっていたか、それとも小さくなっていたか」

「いばっていた。若い者の礼儀が悪いと叱っていた」

「つまり黒社会の大物ということか」

「よく知らない。私、もう黒社会の人とつきあわない」
その言葉は本当だった。ギャンブルが好きで、中国マフィアのカジノに通っていたがイカサマにはめられ痛い目にあつた。それで今度は日本の暴力団が開いている闇カジノに通いだし、そこを摘発した佐江と知り合った。

「もうギャンブルはやってないのか」

「やってない。やったら奥さんに叱られる」

「奥さん？ いつ結婚したんだ」

「先月。あなたの頭を洗った人」

「四十近い、年の差がある。」

「それはおめでとう」

「もういいか。あなたのこと、奥さんに知られたくない」

佐江は頷いた。白衣の男は、佐江のケープを外した。

「髪がびしょびしょだ」

佐江はいつた。白衣の男はタオルで佐江の髪をぬぐい、櫛でなでつけると、でていけというように顎をしゃくつた。

「これで終わりか」

「お金はいらないよ」

雑居ビルをでた佐江は、近くにある中国東北料理のレストランに入った。羊肉と野菜の辛い炒めものとスープ、白米のランチをとる。

味はよく、値段は新宿署近くの中華料理店の半値だ。

腹ごしらえをすませると、JRで新大久保に向かった。新大久保駅から小滝橋通り沿いの雑居ビルまで歩く。地下にある麻雀荘が目的地だった。

午後一時を過ぎたばかりで、開店したての麻雀荘に客はいなかった。扉をくぐると、カウンターの内側にいた、顔色の悪い中年男が、

「おひとりですか」

と訊ねた。佐江は頷いた。

「メンツをお探しなら、電話で呼びますけど、三十分くらいかかります」

「上田さんと話したい」

男は瞬きした。

「上田さん？」

「とぼけなくていい。上田に、佐江がきたといえはわかる」

とたんに男は笑顔を作った。

「これは失礼しました。警察の旦那でしたか」

「いいから。上田を呼んでくれ」

答えて、佐江は入口のソファに腰をおろした。中年男は携帯を手にとると操作し、小声で話し始めた。

「お待ちせしました。上田さんは十分くらいできます」

電話を終えた中年男が告げて、紙コップのコーヒーを運んできた。

「ミルクと砂糖はそのテーブルにありますんで、ご自由にどうぞ」

「ありがとう」

頭を下げ、佐江は中年男を観察した。ひどく痩せていて、生気がない。おそらく重度の覚醒剤中毒だ。

独特の、甘酸っぱい体臭もする。

紙コップを手渡した中年男は逃げるように、カウンターの奥に戻った。そのままじつと動かない。佐江はコーヒーを飲んだ。コーヒーメーカーで淹れたばかりなのか、意外にうまい。

上田というのは、この麻雀荘のオーナーだった。「桃李閣」で死んだ、久保田と木口と同じく、かつて暴力団田代組に所属していた。田代組が潰れたあと別の組に移ったが、日をおかず足を洗った。女房の実家に金をだしてもらい、この麻雀荘を始めた。元極道なので、書類上の経営者は別にたてている。

上田はほどなく現れた。細身で、ジーンズに派手な柄のトレーナーを着け、おかつば頭のような長髪だ。六十年近く前にはやったマッシュルームカットと呼ばれる髪型で、それは極道だった頃からかわらない。

高校時代バンドをやっていた、小遣い稼ぎに当時新宿にあったゴーゴー喫茶で演奏するようになり、それがきっかけで地回りの田代組にひっぱられたという経歴の持ち主だ。

その髪型のせいで、現役時代から極道だとは思われず、さまざまな逸話を残している。

一見軟弱だが、素手の喧嘩ではかつて、新宿の四天王のひとりといわれていた。妻と知り合ったのも、新宿に買物にきて不良にからまれていた女子高生を助けたのがきっかけという、大昔の映画のような馴れ初めだ。

「おい、レジから千円とって、昼飯食ってこい」

入ってくるなり、上田は中年男に目もくれず告げた。

「ごちそうさまです！」

中年男はいつて、レジから金を抜いていった。

上田は佐江の向かいのソファにどっかりと腰をおろした。

「生安でもない、佐江の旦那に叩かれるいわれはないけどな」

腕を組み、佐江をにらんだ。もう六十を過ぎているが日焼けしていて、眼光に衰えはない。

「今のは新しい店長か」

佐江は訊ねた。上田は頷いた。

「先週入れた。前のがパクられたからな」

深夜、早朝に及ぶ麻雀荘の営業は、法令違反で、生活安全課による取締りの対象になる。

摘発されると、責任者である店長をクビにし、新しい店長をすえるのが、違法営業の麻雀荘の常だ。

「ほっておくと、別件でパクられるぞ」

何のことかすぐに上田は理解した。

「やめたといっているし、店でやったら半殺しにする、といっている」

「信じているのか。やってる奴にはすぐにバレる。回してくれと頼む客がでてるかもしれない」

佐江は首をふった。

「人手不足なんだ。今どき、パクられ、要員なんて、しゃぶ中くらいしか見つからねえ」

「どこかの組とくつついてるのか」

佐江は訊ねた。

「それはねえ。入れる以上、身体検査はするからな。組につながっていたら、店が潰される」

上田は否定した。

「あんなんじゃ、パクられたとたん尿検に回されるぞ。新米の制服だってしゃぶを疑う」

「わかったよ、うるせえな。もしまだやってたらクビにする。嫌がらせにきたのか」

「古い仲間のことを訊きにきた。木口と久保田。わかるな？」

「木口は先週、くたばったろう。アブラビルの事故で」
上田はいった。

「知ってるのか」

「あいつが『桃李閣』の店長になったのは、皆知ってた。たいしてうまくもない『桃李閣』に行くのは、足を洗った奴くらいだ」

「あんたもいつていたのか」

「いや。それより、久保田さんも『桃李閣』にいたのか」

佐江は頷いた。

「中学時代の同級生と、半年に一回くらい集まっていた。そこであの事故にあった」

「何てこった。ドスで刺されても、ビール壺で頭カチ割られても死ななかつた人なのに」

上田は息を吐いた。

「わかんねえもんだな。中華料理食いにいつてくたばるなんて、よ」

「二人とつきあいは？」

「木口とは年が近いから、たまにメールのやりとりとかはしていた。久保田さんとはぜんぜんだ。街金が儲かっているうちに手を引いて、悠々自適だつて聞いてたが……」

「木口と久保田の仲はどうだった？」

「あの二人は兄弟分だ。木口は久保田さんになつとなつてた。久保田さんもだから『桃李閣』にいつてたんだろう」

「どつちもきれいに足を洗っていたのか」

「元金貸しと中華料理屋のマナージャーだぞ。まるきり縁を切るつてわけにはいかないだろうが、いい

年なんだ。妙なことはしていなかった筈だ」

答えた上田の表情が険しくなつた。

「まさか、アブラビルの一件は事故じゃないつてのか」

「あれ自体はたぶん事故だ。身許のわからないホトケが二人いてな。ひとりは中国マフィアらしい」

「中国マフィア？ どこだ？ 東北か」

中国マフィアとひと言でいつても、黒竜江省などの東北地方、台湾に近い福建省、香港に近い広東省など、地域で分かれている。

「どこかはわからないが、香港に出入りしていたようだ」

「福建や広東は近いからな。東北は遠いからあまり香港にはいかないだろうが」

「二人のうちのどちらかが中国マフィアとつきあいがあつたつて話を聞いてないか」

上田は首を傾げた。

「さあな。久保田さんは半分引退していたようなものだし、中国人は『桃李閣』なんて日本人向けの、それもうまくもない店にいかないだろう」

「いかなんかの中国人がいたのには理由がある筈だ」

「連れられていつたとか」

「ひとりだつた。ひとりできて飯を食つていて、事故にあつた」

上田は首をふつた。

「わからねえな」

佐江は携帯に入れた顔写真を見せた。

「虎の刺青をしょっている」

「知らない顔だ」

上田は答えた。嘘ではないようだ。

「身許のわからない死人が二人いるっていったな。もうひとりも中国人なのか」

「日本人の女だ。たぶん」

「女？ 女で身許がわからないなんてことがあるのか」

佐江は頷き、女の顔写真を見せた。上田の表情が動いた。

「知ってるのか」

上田は指で写真を拡大した。

「はつきりはいえないが、うちの常連客がつきあっていた女に似ている」

「常連客？」

「週に一回か二回、フリーで打ちにくる。東中野の地主で、ビルを何軒かもってるんだが、奥さんと死に別れちまって、ゴルフと麻雀が楽しみだつて人でな。近所のスナックで知り合つたとかで、えらく熱を上げていた。結婚してもいいくらいのことをいつてたが、このところきてないな」

「女の名前は？」

「覚えてない」

「客は、どこの何という男だ」

「いくのかよ」

「当たつてみて、別人とわかればそれまでだ。あんたに迷惑はかけない」

佐江は告げた。

「もうトシだから、どこか悪くして、引つこんでるのかもしれない」

「それならそうと、あんたに伝える」

上田は考えるように宙をにらんだ。佐江は待った。たとえ雲をつかむような話であつても、当たらないわけにはいかない。

「東中野に城山ビルつてのがある。第一から第三まであつて、第一ビルのでつべんが、その客の住所だ」

「名前は？」

「初芝さんだ。初芝建吉」

「東中野の第一城山ビルだな」

佐江はメモをとつた。上田は頷き、いった。

「思いだした。初芝さんは確か、『ちさと』つて呼んでたな」

佐江は手帳を見た。身許不明の女がもつていた会員証の類で使われていた名前のリストがある。

清水洋子、金村ひとみ、高橋あずさ、木村ちさと、村川加寿子、市倉早苗。

合致する。が、それは上田には告げず、訊ねた。

「初芝の年齢は？」

「七十になつたかどうかじゃないか。ゴルフは昔シングルだったとかで、うまかつた。麻雀は旦、えだつたがな」

カモにしていたようだ。

「ここでいくくらい負けてたんだ？」

「ま、細く長くだから、ならせば月に十かそこいらだ。たまに勝つこともあつたしな」

上田はあつさり答え、つけ加えた。

「ゴルフがうまいからかどうかはわからないが、何にでも自信をもつてな。自分は麻雀もうまいつて

思いこんでた。下手つぼく打つ奴に転がされるタイプだ」

「イカサマだったのじゃないだろうな」

佐江は上田を見つめた。

「まさか。全自動卓だぜ。通しとかもうちはやらせない。客をカモったのがわかったら出禁だし、それでガタくれたら半殺しだ」

上田の目は真剣だった。佐江は立ち上がった。

「手間かけたな」

「初芝さんがもし病気とかになってるなら、教えてくれ。見舞いくらい、いきたいからな」

「連絡する」

告げて、佐江は麻雀荘をでていった。

5

東中野の第一城山ビルはすぐに見つかった。

七階だてで、一階から五階まで商店や飲食店などのテナントが入り、六、七階が住宅の中規模な建物だ。

一階のインターホン脇には、六階が「城山ビル産業」七階が「初芝」と表示されている。

佐江はインターホンで七階のボタンを押した。呼びだし音が鳴ったが、しばらく待っても返事はなかった。

六階を押した。

「はい」

男の声が応えた。

「警視庁の者です。初芝さんにお目にかかりたくて参りました」

「初芝？ 初芝誰です？」

「初芝建吉さんです」

間が空いた。

「警視庁の方とおっしゃいましたか」

男は訊ねた。

「新宿警察署の佐江と申します」

「エレベーターで六階にお越し下さい」

インターホンは切れた。

佐江は六階に上がった。エレベーターを降りた正面に「城山ビル産業」と書かれた扉があった。

ノックし、佐江は扉を引いた。応接セットとデスクがおかれたオフィスになっている。

男が二人に女がひとり、デスクに向かっていた。正面を向いた大きなデスクの上に、写真の額がおかれている。白髪を七・三に分けた男の写真だ。

手前のデスクにいた、三十くらいの男が立ち上がった。佐江は身分証を呈示した。

「お忙しいところを恐れいります」

身分証をあらため、男は名刺をさしだした。

「城山ビル産業 生野和至」とある。

「初芝さんのお身内ですか？」

「甥です。伯父は、先月、亡くなりました」
「初芝建吉さんが、ですか？」

「頷き、生野和至は写真のおかれたデスクをふりかえった。
「癌がでした。病氣ひとつしたことがなかったのに、見つかって半年ほどで亡くなりました」
写真の額を見たときに予感があった。」

「伯父のことで何か？」

生野和至は訊ねた。眼鏡をかけ、色が白い。ゴルフとも麻雀とも縁がなさそうに見える。

「初芝建吉さんではなく、初芝さんと親しくしておられたかもしれない女性のことで、お話をうかがおうと思って参りました」

生野の顔が険しくなった。

「あの女が何かしたのですか」

「ご存じの方ですか」

「ちさとつて女でしょう。近所のスナックで伯父をひっかけたんです」

「スナック？ どこのスナックですか？」

「この先の『浜木綿はまゆづ』って店です。伯父はあまり酒は飲めませんでした、カラオケをしにいつてました。そこで知り合ったみたいです」

生野は答えた。

「そのスナックで働いていたのですか」

「いえ、客です。伯父がやめめだつてのがわかって、たらしこんだんですよ」

「生野さんも会ったことがあるんですか」

生野は頷いた。

「一時、伯父は夢中になつて、後添いにするなんていいだして。どこの女ともわからないのに。親族じゅうで止めました」

「親族というのは？」

「両親と私です。母が伯父の妹なので」

「初芝さんは納得されたのですか」

「すつたもんだしたあげく、籍を入れないかわりに、それなりのことをしてやる、という条件で話がつきました。伯父の病氣がわかるまではつきあっていました、癌だと知ったとたん連絡が途絶えたんです。そうなつてようやく伯父もだまされていたつて気づいたみたいでした」

「それなりのことというのは、どんなことをされたのです？」

佐江は訊ねた。

「金です。はつきりした額は知りませんが、金を渡したんです」

「いくらくらいですか？」

「たぶん、ですが、一千万か二千万」

「そんな大金を渡したんですか」

「籍を入れたら、亡くなつた伯父の財産の半分があの子のものになつたかもしれません。会社の資産もありますし、それを考えれば安くすんだともいえます」

生野はいまいまするに答えた。

「初芝さんと、ちさとさんは、どれくらいの期間、交際されていたのですか」

「一年か、二年だと思えます。最初がいつ頃なのかは知らないのです」

「初芝さんと知り合ったとき、ちぎとさんが何をしていたのか、ご存じですか」
佐江の問いに生野は首を傾げた。

「伯父の話では、昔、劇団の女優か何かをしていて、そのあと保険の外交員をやっていたというのですが、本当かどうか怪しいものです。水商売をやっていたのじゃないかと思えます。あ、水商売をしていたからどのの、というわけじゃないですが」

「生野さんも、何度も会われていた？」

「はい。忘年会や新年会にも連れてきてましたし、会社のゴルフコンペのパーティにも呼んでいましたから」

佐江は携帯をとりだし、身許不明の女の顔写真を見せた。

「この女性ですか」

のぞきこみ、生野は頷いた。

「はい。まちがいないです。でも、この写真で——」

「新宿で起きた、ビルの崩落事故に巻きこまれたんです」

「中華料理屋が崩れたって事故ですか」

佐江は頷いた。

「ひとりで来店していて、事故にあったようですよ」

「亡くなったんですか」

「はい。ですが身許がわからなくて。どこに住んでいたか、ご存じですか」

「今年の三月までは、伯父が世話をした、中野のマンションに住んでいましたが、金を受けとったあとではでていったようです。それからは、どこにいたかわかりません。身許がわからないというのは、どう

いうことなんですか？」

「所持品の中に身分証の類や現住所のわかるものがなく、ショップの会員証などは複数の名義で、どれが本名なのか不明だったのです。その中に、木村ちさとというものもありました」

「それは。木村ちさと。やっぱり怪しい女だったんだ」

いったあと、

「そういえば——」

生野は目をみひらいた。

「伯父が、台湾にゴルフ旅行に連れていこうとしたら、飛行機が駄目だから断わったことがありました。パスポートを見られたくなかったんだ。木村ちさとっていうのも、きつと本名じゃなかったにちがいない」

「そうかもしれません」

「あの事故で死ぬなんて、天罰が下ったんだ、きつと」

よほど嫌っていたのか、生野はいった。

「身内のことを何か聞いたことはありませんか。出身地や両親、兄弟などについて」

佐江は訊ねた。

「出身は東京とっていました。家族のことは何も。身寄りがいない、かわいそうな女だと、伯父はいってました。どこまで本当だったかはわかりませんが」

「伯父さんの他に親しくされていた人をどなたかご存じありませんか」

生野は首を傾げた。

「さあ。伯父といるときはいつも控えめにふるまっています。私から見ると、猫をかぶっているという感

じでした。でも話すと、妙になれなれしくて、嫌な女だなんて思っていました」

「この女性の生前の写真をおもちですか？」
佐江が訊ねると、生野は立ち上がった。額のおかれたデスクのひきだしを開け、アルバムをとりだした。「コンペのパーティのときの写真があったと思います。写真は嫌いだとかいって、いつも逃げてたのですが、スナップが一枚だけあったような――」
これだ、とつぶやいてページからひき抜いた。

食堂らしき施設の中で七、八人の男女が談笑している。その端にひっそりと立っている女を指さした。白いパンツにオレンジのセーターを着け、グラスをもつ手に煙草をはさんでいる。小さくても目鼻立ちが整っているのがわかる写真だ。

「美人ですね」

佐江がいうと、生野は口もとを歪めた。

「本人はいいままでしたが、きつと整形です。年だつて四十八といつてたけど、本当はもつといつてたのじゃないかな」

「お借りしてよろしいですか」

「どうぞ、おもち下さい」

札をいい、佐江は写真をしまった。「城山ビル産業」をでて、一度新宿に戻ることにする。夜になってから、木村ちさとが初芝建吉と知り合つたというスナックを訪ねるつもりだ。

池端への報告は明日でいいだろう。

残っている書類仕事のつづきをやらなければならない。

面倒だが、新しい任務を与えられたことで片づけようという意欲も生まれていた。

6

連絡があつたのは、山崎秋絵がオフィスをでる準備を終えたときだった。パソコンを含むすべての機材の電源が切れていることを確認し、警備会社のコントローラーを作動させ、扉に鍵をかけようという瞬間に携帯が鳴り始めた。

バッグの電話をとりだす前に、今夜仕事で動いている調査員がいたかと思ひ浮かべた。

いない筈だ。「女の砦」には、全部で七名の調査員がいるが、今夜、動いている者はいない。とすると、トラブルの発生ではない。

そのままオフィスの扉に鍵をかけ、廊下に立って、携帯をとりだした。鳴っているのは、二台あるうちの私用携帯だ。所員全員に支給している業務用携帯と私物の携帯は、キャリア（通信会社）が異なる。どちらかのキャリアに不具合が生じて、非常時の連絡がつくようにするためだ。だから、鳴っているのが私用携帯だとしても、仕事の連絡ではないとは限らない。

それに、この数年、所員以外で私用携帯にかけてきたのは、熊本の実家にいる姉くらいのもんだ。子供の頃秋絵をかわいがってくれた叔父の死を伝える電話だった。

「葬儀にはでられない、香典を送る、と秋絵が告げると、姉はため息を吐いた。

「仕事がそんなに忙しいの。たまには顔を見せてよ」

「帰つてもあたしのいるところはないから」

「あんたまだ、気にしてるの？」

「そうじゃないけど、仕事も忙しいし」

「体を壊さんようにね」

そんなやりとりだった。最後に帰省したとき、離婚を父になじられた。母は、自分が悪いと泣いた。出産しにくい体に生まれたのは秋絵の責任ではない。といって、母親を責めるつもりもなかった。

私用携帯の液晶画面には、見知らぬ携帯番号が表示されていた。やはり調査員の誰かがトラブルに巻きこまれたのだろうか。

「はい」

携帯を耳にあて、秋絵は応えた。相手の正体がわからないうちは名乗らない。

「秋絵さんか。堀内だ。戸塚署にいた堀内だよ」

初老の男の声がいった。秋絵は目をみひらいた。結婚式の仲人をしてくれた人物だ。堀内崇^{たかし} 警視正。

「堀内署長。お久しぶりです！」

「もう署長じゃない」

堀内はやわらかな口調でいった。結婚式をあげたのは九年前だ。そのとき戸塚署の署長だった堀内はとうに退官している。

「わたしには署長です」

ノンキャリアの叩き上げで、苦労人の堀内は、署員に尊敬されていた。

「滝とは連絡をとっているか」

堀内は訊ねた。

「このところ忙しくて、ずっととっていません」

別れた夫の名を堀内が口にした瞬間、勘が働いた。

「滝に何かあったのですか」

最後にもらったメールでは、古巣の機動捜査隊に戻った、とあった。二十七のときに機^き捜^{さう}に配属された滝は、そこでマルB対処のいろはを、先輩刑事から教わったといっていた。

事件発生^{じけん}の報をうけ、最初に現場に駆けつけるのが機^き捜^{さう}の刑事だ。受傷^{じゆう}する確率は高い。

「ニュースを見てないか」

「いえ、ずっと仕事をしていました」

「新宿で、大きな事故があった。ビルが崩れたんだ。その現場にいたらしい」

「滝が、ですか？」

「そうだ。新宿に戸塚時代の部下がいてね。私に連絡をくれた」

「滝の怪^{けが}我^がは？」

堀内は沈黙した。それで秋絵は悟った。

「死んだ？」

「残念だが、そのようだ」

秋絵は腕時計を見た。午後十一時二十分。

「事故はいつ？」

「二十時前後らしい。ビルの床が抜け、下の階に落下した。相当数の死傷者がでていると、ニュースではいつている」

秋絵は息を吸いこんだ。

「遺体はどこに？」

「今は新宿署にある。検死がすんだら会えるが……」
「任務で現場にいたのでしょうか」

訊ねてから気づいた。滝が配属されていたのは、池袋の分駐所だ。新宿には別の分駐所があり、滝の担当地域ではない。

「詳しいことはわからない」

「滝は、ひとりだったのでしょうか」

「現場にか？ それはわからない」

「いえ、そうではなくて——」

堀内は察した。

「ずっと独身だと聞いた。機捜に戻ったのじゃ、暇もなかったらう」

堀内の言葉に、秋絵は息を吐いた。嘆き悲しむ人間は少ないほうがいい。

警察官だったとき、不慮の事故や犯罪で身内を失い、泣き崩れる人を嫌というほど見た。

一般人にとっては一生に一度あるかどうかという悲劇が、警察官や救急隊員にとっては日常だ。

同情する気持はあっても、常に同情していたら、こちらの心が壊れる。それゆえ、事務的に処理し、やり過ぎず術も学んだ。

滝はそれが下手だった。警察官が事故や事件にかかわるのは、事後だ。被害が生じてから、職務としての処理に立ち会う。にもかかわらず、事前に何かができたのではないかと、思い悩むことが滝にはあった。

それは滝のやさしさであり真面目さの表われだった。戸塚署時代、そういう滝に惹かれ、三つ下の弟のように接し、恋愛に発展し、結婚した。

滝は子供を望み、秋絵もそれに応えようと思った。退職したのも、子作り子育てに専念しようと考えたからだ。計画通り妊娠はできたものの、出産までには至らなかった。何度かそれがつづき、秋絵の体

質に原因があることを医師に知らされた。

子供をあきらめた秋絵は、仕事をもった。

警視庁OBが経営する興信所に入り、調査員として働いた。そこで女性の側に立つ調査員の必要性を学び、二年前に独立した。

女による、女のための調査会社、それが「女の砦」だ。業務は浮気調査だけではない。

息子や娘の素行を心配する母親や、社員や取引先について知りたい女性経営者、女性にしか感じえない違和感や不安の解消に寄り添うのが、「女の砦」の業務だった。

滝との離婚は、独立が契機になった。秋絵の気持ちを汲みとったかのように、滝がもちだしたのだ。

互いに、決定的に気持が離れていたわけではなかった。が、秋絵は「女の砦」に専念しなかった。同時に、子をもちたいと願う滝のもとにこのまま自分がとどまってよいのか、という思いもあった。

「女の砦」の開業は、秋絵が四十のときで、滝はまだ三十七だ。再婚し、子作り子育てをする時間はある。協議離婚し、二年が過ぎた。あつというまの二年だった。

幸いに「女の砦」は順調だった。調査結果に満足した顧客が別の顧客を紹介し、調査の依頼が途切れすることはなかった。

「女の砦」には、女性スタッフしかいない。

徹頭徹尾、女性によって運営されている。

調査の内容によっては、男性の調査員が必要になる場合もある。そういうときは、業務提携している、秋絵の古巣の興信所から男性スタッフを借りた。

離婚してから一年は、滝とメールや電話で連絡をとりあい、たまに食事を共にした。が、二年めに入ってから、連絡が途絶えがちになっていた。

「滝は、機捜の仕事が好きでした。いの一歩に現場に駆けつけられるから、と」
秋絵は告げた。

「スレるということのない警察官だった。惜しい男をなくした」
堀内は応え、つぶけた。

「もし会いたいなら、新宿にいる知り合いに伝えるが——」

「今日の今日では、新宿署も混乱している筈です。明日以降、落ちついた頃に、わたしのほうから連絡をとってみます」

「そうか。滝のご両親はどうしている？」

「お母さんが亡くなっていて、お父さんはかなり前に再婚された筈です。妹さんがいますが、確かご主人の仕事で中国にしていると聞いています」

「すると、すぐに知らせなきゃならん者は——」

「お父さんと妹さんです。わたしのほうから連絡をします」

「頼んでいいか」

「お任せ下さい」

知らせてくれた礼を告げ、秋絵は電話を切った。

再びオフィスの鍵を開け、中に戻った。警備会社のコントローラーを切り、自分のデスクにすわる。

滝の父親と妹の携帯電話の番号は知っていた。むろん警視庁も、滝が受傷や殉職した場合に備え、連絡先は把握している。

パソコンを立ち上げ、インターネットのニュースサイトを開いた。事故のことは、トップで報道されていた。

「新宿歌舞伎町のビルが崩落。営業中の中華料理店で多数の死傷者」

ニュースサイトの情報量はわずかだった。築七十年以上の古いビルの床が抜け、営業中だった中華料理店「桃李閣」の客と従業員が下層階に落下し、そこに崩落した建物の瓦礫が降り注いだ。同時に火災も発生し、二十名近い死傷者がでている模様だ。

そこに滝がいたのだ。二十時前後なら、食事をとっていたのだろう。

老舗だとニュースにはあつたが、滝の口から「桃李閣」の名を聞いたことはないし、まして二人で食事をした覚えもない。

時間と場所を考えるなら、誰かといった可能性が高い、と秋絵は思った。

滝の勤務する分駐所は池袋で、新宿は管轄区域ではない。にもかかわらず、新宿で食事をしていたというのは、機捜の同僚や池袋署などの顔見知りには会いたくなくなつたからではないか。

探偵としての勘が働いた。つまり滝の食事の相手は女性だった可能性が高い。それも、関係を周囲に知られたくない相手だ。

同僚か、事件で知り合った関係者か。

わずかに胸がざわめいた。滝が新しい相手を見つけていたとあって、非難する権利は自分がない。むしろ喜び、後押しすべき立場だ。

秋絵は唇を噛んだ。そうだとわかっている、割り切れない気持がある。

それは、滝の死が、その相手がいたことによるものだと思ってしまうからだ。

デートをする相手が出て、だが池袋は避けたくて、滝は新宿歌舞伎町の中華料理店にいた。そこで事故に巻きこまれ、命を落とした。

その相手の責任ではない。責任ではないが、相手がいなければ、滝は命を落とさずにすんだ。

不意に視界が曇った。瞬きした瞬間、涙がこぼれ落ちた。ティッシュを目にあて、深呼吸した。落ちつこう。

その相手にだつて家族がいて、今この瞬間、心を痛めているかもしれないのだ。あるいは、相手の女性には夫がいたかもしれない。

その夫の立場になったら、どれほど滝が憎いだろう。

その一方で、滝が不倫をする筈はない、とも思った。女性に奥手で、正義感の強い滝に不倫はありえない。

まずは滝の家族に連絡だ。秋絵は携帯を手にとった。

7

初芝が木村ちさとと知り合ったというスナック「浜木綿」での訊きこみに、大きな収穫はなかった。

木村ちさととは、初芝と知り合った日に初めて「浜木綿」に現れ、近所に引越してきたばかりだと自己紹介して、初芝とそれほど言葉を交わすこともなく帰っていったという。

二度めに来店したとき、店のママが風邪で休んでいたこともあって、初芝のカラオケのデュエットの相手をつとめた。

本人は得意ではないといっていたが、歌はかなりうまく、初芝に気に入られ、何曲もデュエットをした。その日の勘定をもつとといった初芝に、それは結構ですと固辞したのも、より気に入られる理由になった。が、「浜木綿」のママとマスター夫妻の目からは、木村ちさとが初芝を狙っていたことは明らかだった。元女優で結婚歴がなく、保険の外交員をしているという身の上話も、夫婦からすれば眉つばだったと

いう。

だが客のことをあれこれというのは、水商売ではご法度だ。

やがて誰の目にも明らかかなほど二人は親しくなり、「浜木綿」に現れなくなった。

木村ちさととは、やもめの金持である初芝建吉の情報をどこかで仕入れ、たらしこんだのだ。が、美人局のように脅迫者が現れることはなく、二人はゴルフだ、温泉だと交際を楽しんでいるようなので、よけいな心配だったかと、夫婦は胸をなでおろした。

それが、初芝が再婚するといいたし、騒ぎになっていると聞いたのが、出会ってから一年半後のことだ。結婚すれば、「城山ビル産業」を乗つとられかねない。周囲がよつてたかつて初芝を説得し、結婚しないかわりにそれなりのことをしてやるということになった。

初芝は傍目（はため）にわかるほど、意気消沈していたという。それでも二人がつきあっていけばよかったのだが、追い打ちをかけるように、初芝の癌が見つかり、余命半年という宣告が下った。

木村ちさとが姿を消したのは、その直後だった。最期の時間を共に過ごしてもらいたいという初芝の願いはかなわなかった。

木村ちさとを見た者は、それきりいない。

「あれが美人局だったら、初芝さんだつて叩き上げだし、若い頃は無茶もしたつていつてましたから、そんな深手を負うことはなかったと思いますよ。せいぜい、百か二百の金で手を打ったでしょう。後添いにしたいくらいのぼせちまったのがマズかった」

「浜木綿」のマスターはいった。

「初芝さんは木村ちさとさんに、かなりの金を渡したのでしょうか」

開店前の早い時間に訪ねた佐江に、「浜木綿」の夫婦は協力的だった。

「それはもう。初芝さんが焦ったんです。自分が死んだら、ちぎとさんに金が渡らなくなるかもしれない。最期を看とつてもらうためにも、それなりのことをしてやりたいって。入院する少し前に、久しぶりにひとりで見えておっしゃっていました」

ママが答えた。

「いくらくらの金を渡したのでしょうか」

ママとマスターは顔を見合わせた。

「はつきりとした金額はわかりませんが百の単位じゃなかったと思いますよ。それも税務署に目をつけられないようにして、現金で渡したみたいです」

「そうしたら、突然連絡がつかなくなつて。携帯もつながらないし、住まわせてやつたマンションも引き払い、音信不通になつて。あんなによくしてやつたのにつて、本当にくやしそうです」

ママが涙ぐんだ。

「うちとしても、知り合つた場なわけで、知らん顔もできず、お客さんやいろんな筋に消息を訊ねたのですが、まったく手がかりなしで、もしかしたら東京どころか日本にすらないのじゃないかって……」

マスターはいった。

「桃李閣」で死亡した身許不明の女が木村ちぎとであることも、佐江が見せた写真で二人は確認していた。ママが目もとに薄く残る美容整形手術の跡を覚えており、決め手になった。

「ただうちにきたきつかけがわからないうです。初芝さんに前から目をつけていて、うちにくるといふのを調べて網を張つたのかなつて、マスターといつていたのですが」

「姿を消したあとは、どこかで見かけたという噂も聞いていませんか」

佐江の問いに夫婦は首をふつた。

「まったく聞いてません。みごとに消えてしまつたんです」

午後七時を回り、その日最初の客が「浜木綿」に入つてきた。近くの会社勤めらしい男三人だ。

佐江は礼を告げ、「浜木綿」をでた。

署に戻るか、このまま自宅に直帰するかを考えていると携帯が鳴つた。

「例の刺青の件、中国人の彫師が教えてくれた」

前置き抜きで彫猛はいった。佐江は立ち止まつた。

「中国のものか？」

「そうらしい。虎といつしよに彫られているゾンビみたいな奴は、虎俵とか虎鬼といわれている幽霊で、虎に食われた奴が化けたものだそうだ」

告げて、彫猛は虎俵と虎鬼の漢字を教えた。「虎鬼」は、池袋の理髪店主が「フーグイ」と発音して鏡に指で書いた文字と一致する。

「虎に食われた奴の幽霊だど？」

「虎に食われると、その虎の手下みたいになつて、猟師がしかけた罠を壊したり、襲つた人間の服を脱がして虎が食いやすいようにするらしい」

彫猛はいった。

「本当にそんなのがいたのか」

佐江は思わず訊ねた。

「迷信だろう、もちろん。虎に食われた奴はいたかもしれないが、ゾンビになつて虎の手助けなんかできわけない」

彫猛は笑いとばした。

「それはそうだな。で、虎俵とか虎鬼は、よく彫る絵柄なのか」
 「いや、虎を彫ってくれというのはいらぬらしいが、食われた奴まで彫るつてのは珍しいようだ。たぶん安徽省の出身なのじゃないかといつていた」

「安徽省？」

「水墨画の題材にされる黄山という景勝地があるところらしい。その安徽省には昔から虎が多くて、虎に関するいろんな迷信や伝承が残っているつていうんだ。虎だけじゃなく虎俵を彫ったのは、自分が安徽省の出身だというのを、周囲にわからせるためだろう、と」

佐江は息を吸いこんだ。安徽省という地名は初めて聞いた。

「その彫師は、彫った奴に心当たりはないのか？」

「彫った奴も彫られた奴も、中国人だろう。だが知り合いじゃない、といつていた」

「わかった。参考になった。礼をいう」

「これでいいか」

「今のところは。もしかしたら、その中国人の彫師を紹介してくれと頼むかもしれん」

佐江がいうと、

「それは駄目だ。俺の信用にかかわる。あんただつてわかるだろう」

彫師は即座に断わった。

佐江は息を吐いた。

「わかった」

電話を切り、携帯のマップで中国の地図をだした。安徽省と入れると、中央部東寄りの一面が表示された。沿岸部ではないが、比較的海に近く、浙江省をはさんで上海の西側にある省だ。

黒竜江省や吉林省のような東北地方とは離れていて、むしろ福建省や広東省に近い。

その点でも、香港の黒社会の人間の結婚式で見かけたという、理髪店の店主の話と矛盾しない。安徽省の出身者である可能性が高いというのは、ひとつの手がかりだ。

佐江は自宅に帰ることにして、JRの駅に向け、歩き出した。

翌日、出署すると、捜査本部に池端を訪ね、佐江は口頭で判明した事実を伝えた。

「一日で、そこまで調べられたのですか」

池端は目を丸くした。

「運がよかつたんです。田代組のOBのところに話を聞きにいったら、たまたま木村ちさとのことを知っていました。もつとも、身許不明の二人のあいだにつながりはないようですが」

佐江は告げた。

「確かにそうですね。安徽省出身のマフィアと、やもめの金持を狙う女詐欺師ではつながりようがない。ただ、二人とも単独で『桃李閣』にきていたのは、偶然でしょうか」

池端は応えた。

「木村ちさとのほうは、狙いをつけたカモに近づく目的があつたのかもしれない」

佐江はいった。

「その可能性があつたとすれば、誰です？」

「4卓にいた『番長会』の誰かでしょう。もしかすると田代組から足を洗ったあと、金貸しで稼いだ久保田を狙っていたとか」

「でも元マルBですよ」

池端は首を傾げた。
「足を洗って時間がたっていますから、マルBだったというのを知らなかった可能性もあります。それに女に弱いマルBは珍しくありません。女房に頭の上がらない組長を何人も知っています」

佐江は答えた。

「なるほど」

池端は頷いた。

「詐欺師のことは詳しくありませんが、木村ちさとが姿を消してから半年以上が経過しています。そろそろ次のカモを探段階に入っていたのではないのでしょうか」

木村ちさとが消えたのは、初芝建吉が余命半年という宣告を受けた直後のことだ。

「しかし、千万単位の金を得てから半年では動くのが早すぎませんか」

「若い男とちがつて、高齢の男は疑い深い。簡単にくつつこうとすれば正体を見破られるかもしれない。時間をかけて近づくには、早め早めのしかけになるのではないですか。それに自分の器量の衰えもある。若い女ではありませんから、一年、二年を無駄にはできないと考えていたのかもしれない」

佐江はいった。

「確かにそうです。美人ほど容色の衰えを気にするものですしね」

「あるいは木村ちさととは『桃李閣』で待ち合わせをしていたのかもしれない」

「その人物から問い合わせがきていないのはなぜです？」

「木村ちさとの共犯者だったからというの考えられませんか。やもめの金持というのは、そう簡単には見つからない。情報提供者がいておかしくない。たとえばその情報提供者が、次のカモ候補である久保田が『桃李閣』に現れるのをつきとめ、木村ちさとに面通しをさせようとしたのかもしれない」

「なるほど。顔を見てつきあえるかつきあえないかを判断しようというわけですね。いくら詐欺師でも、生理的に駄目な相手は難しいでしょうか」

池端の言葉に佐江は頷いた。

「ところが共犯者が到着する前に、崩落事故が起こった。問い合わせはしたが、木村ちさととの関係を警察に知られたくない共犯者は、その場から立ち去った」

「仮りにそうだとすると、その共犯者は男でしょうか、女でしょうか」

池端は訊ねた。佐江は首をふった。

「そこまではわかりません」

池端は息を吐いた。

「そうですね。それに厳密にいうなら、木村ちさととは詐欺を働いていたわけではない。後妻の座を狙っていただけで、金は初芝のほうから渡していた」

「贈与税を脱税したかもしれません、金品の要求をしたという話は聞いていません。とはいえ、警察とはかわりたくはなかったでしょう。あるいは、逮捕歴までではないものの、木村ちさとには詐欺などの疑いで取調べられた経験があったのかもしれない」

佐江はいった。池端は考えこんだ。

「もしかすると、待ち合わせ相手には逮捕された経歴があり、警察を避けたとも考えられます」

「それと、もうひとり身許不明の男ですが、中国公安部に指紋モウを送って問い合わせるのはどうでしょう。日本には記録がなくても、中国では逮捕歴があるかもしれない」

佐江の言葉に、池端は顔を上げた。

「早速手配します。それで、佐江さんには申しわけないのですが、もうしばらくこの形で捜査をつづけ

ていただけですか。崩落したいは、人為的なミスによる事故という判断になりそうなのですが、身許のわからないこの二人のことが気になっているので」

「かまいません。報告は、今日のように口頭でよろしいのですか」

「大丈夫です」

刺青の男に関しては、中国公安部から情報が得られれば大きく進展するだろう。

だがそれには時間がかかる。

安徽省出身で虎の刺青を入れた、中国黒社会の人間がなぜひとりで「桃李閣」にいたのか。佐江も興味を感じていた。

が、そのことをいうなら、崩落事故の起きた日、ひとりで「桃李閣」にいた客すべてに疑問がある。

かつての後輩、滝慎二もそうだ。池袋の分駐所に配属されている機捜の刑事が、なぜ歌舞伎町の中華料理店にいたのか。

任務だったとは考えられず、食事をするにしても、「桃李閣」より安くてうまい店は新宿にいくらでもある。

誰かと待ち合わせていて、職場のある池袋では会いたくない相手だったのか。

その相手が「桃李閣」を指定したので、滝は早めに到着し、ビールを飲みながら待っていた。離婚していた滝が女性とさして食事するのに不都合はない。

池袋を避けたのは、何らかの事情があつてのことだろう。池袋署勤務の女性警察官か、事件で知り合った女性などが相手だったか。

佐江は息を吐いた。

誰かを待っていたという仮定はともかく、女と決めつけるのは早い。

滝の相手が情報提供者で、地元の池袋でデコスケと会っているのを見られたくないと考えたのかもしれない。

刑事になって二十年近くになる滝には、懇意にしている情報提供者が何人かいた筈だ。

ポン引きや元マルB、クスリの密売人など逮捕がきっかけで知り合う犯罪者は数多い。そんな中で、個人的にウマが合つたり、ある種の義侠心から警察官に情報を提供してくる者がいる。

提供をうけた警察官は飯を奢つたり、いくらかの現金を謝礼に払う。

が、金だけが目当ての情報提供者は信用できない。金欲しさに偽の情報もちこむことがあるからだ。そういう人間は、金さえくれるなら、他の警察官やマスコミ関係者にも情報を売るし、本当に大きなネタはつかんでこない。

ひとりの刑事にだけ情報を提供する者が、重大なネタをもたらす。信頼関係があつて初めて、場合によっては自分の身が危うくなるような情報すらもつてくる。

滝がそういう情報提供者と会おうとしていた可能性はある。ビールを飲んでいたのも、心を許している相手だったからとも考えられる。

事故に巻きこまれなかった情報提供者が、滝の安否確認をせず、その場を立ち去つたのも理解できる。滝にとっては情報提供者でも、他の警察官には、犯歴のある疑わしい人間に過ぎないからだ。

ペテランの刑事は、情報提供者のことを同僚にも話さない。同僚の口からその存在が外部に伝われば、立場が危うくなるような者もいる。

彫猛が、佐江に中国人彫師を紹介するのを断つたのも同じ理由だ。

警察官とつながりがあると知られれば、客や仲間内での信用を失う。失うだけならいいが、密告者の疑いをかけられ、生命に危険が及ぶ可能性すらある。それでも尚、情報を提供するのには、友情や恩義を

感じているからだ。
嫌われ恐れられるだけでは、すぐれた刑事とはいえない。

8

滝の妹の許可をとりつけ、秋絵はアパートの大家から滝の部屋の鍵を借りた。いずれにしても、部屋にある私物の処分を誰かがおこなわなくてはならない。滝の父親も妹も、秋絵がするという申し出を快諾した。

滝の住居は、離婚してからかわらず、練馬区高松の2DKだった。光が丘駅が近く、通勤にも買物にも便利な場所だ。

秋絵は最近、「女の砦」の事務所に近い、新宿区の四谷に引っ越していた。

離婚したあと、一度だけ秋絵は滝のアパートを訪れたことがあった。滝の普段着が秋絵の荷物にまぎれこんでおり、それを届けたのだ。

宅配便で送ることもできたが、滝がどんな暮らしをしているかが気になり、理由にして訪ねた。そういう意味では、離婚後も滝に対し、母親のような気持が残っていた。

滝は中学生のときに病気で母親を亡くしている。そのせいか、母親のように接されることを厭わなかった。

決して滝が子供っぽかったというわけではない。母親に甘える時間が短かったせいも、むしろ老成していた。母親のように接したかったのは秋絵のほうで、それをわかった上で滝は受け入れてくれたように思う。

一方で、真面目すぎるというか一途なところが滝にはあった。警察官という職業は、打ちこめば打ちこむほど、私生活や健康を犠牲にしかねない。

ベテランになればそのあたりのバランスがとれるようになるのだが、警察官になって二十年近くがたっているのに、滝はそれができないところがあった。

自分がそうであるため、他人も同じだと思ひこむ。離婚の主原因はまさにそれだった。

子作りがうまくいかず、警察も退職した秋絵が、興信所勤務を経て「女の砦」を立ち上げたとき、主婦と経営の両立は難しいだろうと、滝が言い出したのだ。

最初の数年は難しくても、軌道にのれば何とかなる、と考えていた秋絵とは反対だった。

やるからには全力で当たるべきだ。自分の世話などにエネルギーを割くべきではない、と滝はいった。秋絵が母親のように滝の世話を焼いていたことも理由になった。

滝の理解が得られれば何とかなっただかもしれない。が、その一方で子をもちたいという滝の願いを秋絵はかなえることができない。

一途であり、不器用なのが滝だった。秋絵は、そんな滝に惹かれ、そして離婚することになった。それだけに、滝の身体が秋絵は気になっていた。過労で健康を害したり、現場で受傷するのではないかと、口にはしないものの案じていた。

なのに病気で受傷でもない理由で、滝は死んでしまった。
なぜこんなことになったのか。

「桃李園」の犠牲者の身内は、ひとり残らずそう思ったに違いない。
食事の最中に、足下の床が抜けるなど、予想がつく筈がない。